

第 34 回庭野平和賞 受賞記念講演  
【仮訳】

「宗教の今日的役割」

ムニブ・A・ユナン  
ルーテル世界連盟 名誉議長  
ヨルダン及び聖地福音ルーテル教会 監督

親愛なる皆さま

本日ここに皆さまと共におりますことを大変嬉しく思っております。私は、聖地エルサレムから参りました。エルサレムは、ユダヤ教徒、キリスト教徒、ムスリム、3つの宗教の信徒にとって神聖な場所であり、イスラエル人、パレスチナ人、双方にとっては政治的にも中心となる場所です。エルサレムでは、宗教が人々の生活全般に影響を持っており、宗教に關係なく物事が決められるということは、ほとんどありません。

それゆえ、庭野平和財団のように、いのちの最も深い問い合わせに対して宗教の役割を真剣に考えている団体を、私はありがたく思います。私たちやエルサレムの人々が共に住んでいる地球の多くの地域社会、コミュニティにとって、公正で永続する平和を切に求めることほど重要なことはありません。

第 34 回庭野平和賞の受賞者として、偉大な信仰を持つ方々の仲間に入れていただくことは、私にとって大変光栄なことです。受賞者リストの中には、私が尊敬すると共に、その方から多くを学んだ方々がおられます。第1回の受賞者ヘルダー・カマラ大司教をはじめ、エスター・アビミク・イバンガ師、フィリップ・ポッター博士、グナール・スタルセット師、エル・ハッサン・ビン・タラール王子殿下と、庭野平和賞は、平和構築の努力における宗教の重要性と必要性を私たちに伝えようとしてきました。

また、私は、この美しい国・日本を訪問する機会を得たこと、そして、日本の皆さんにとっても親切に歓迎していただいたことを、大切に心に留めようと思います。日本と日本の皆さまは、戦争や甚大な人的被害の廃墟の中から美と新たな命を生み出した高い精神性のはつらつとした力強さについて、世界に示すべき多くのものを持っておられます。

本日、私は、世の中における宗教の役割について、特に平和の構築を強く求めるための宗教の役割についてお話ししたいと思います。初めに私は、庭野平和賞の受賞者で、スイスのカトリック司祭であり神学者であるハンス・キュング博士の考えを振り返ってみたいと

思います。キュング博士は、早くも 1982 年には「宗教の平和なくして世界の平和はない」とも言える信念を表明されました。その後、博士は元となった考え方を次のような言葉に発展されました：

宗教間の平和なくして国家間の平和はない  
宗教間の対話なくして宗教間の平和はない  
宗教の根本を探究することなくして宗教間の対話はない

キュング博士はイスラームについての著作の中で、特に、サミュエル・ハンティントンの「文明の衝突」論という分裂する世界観について述べています。ハンティントンが、他の文化の本質を、彼自身の西洋キリスト教の視点からみた違いによって示そうとしたのに対して、キュング博士は、他の信仰の伝統から来た人の話に耳を傾け、その人のコミュニティの土台となる考え方や人々の動機付けとなるものをより良く理解しようとすることが大切であると主張したのです。

宗教は、それ自体が政治を構成する要素であり続けております。このことには、地域的な、世界的な意味合いがあります。ある有名なアメリカの政治家が語ったように、「政治はすべからく地元第一」です。世界中の多くのコミュニティにおいて、宗教的信念は公の論議の場においてますます大きな影響を与えるようになっています。

身近な地域や世界の出来事の中で、宗教がマイナスの役割しか果たしていないと見られている社会が数多くあります。近年は、多くの過激な集団が聖典から章句を抜き出し、それを合理的な文脈から切り離して読み上げて一般化し、他者に対する迫害を正当化しています。また、政治家が、民衆扇動やポピュリズムを使って過激主義を支持したり反対したりすることによって、過激主義を利用しようとしています。

政治的な利益と宗教的には認されたかのような過激主義との連携は、危険な傾向です。それは特に中東において危険です。過激主義は一つの宗教のみに結び付けられるものではありません。どの宗教も過激主義を独占することはできません。エルサレムでは、聖書の名において土地を占有しようとするユダヤ人入植者と、その入植者の行為を大挙して支持しようとする政治家の過激主義に、日々、私たちはさらされています。私たちは、イスラームの極度な解釈こそが強力で世俗的な権力を持つ敵に対抗する手段であると考えるムスリムに挑まれています。そして、時の終わり、ハルマゲドンがいつかそこで起きるであろうと思い描いて私たちの都にやって来たクリスチヤン・シオニストに挑まれているのです。そうした人々が、エルサレムにおいてのみならず、世界全体において、終末論的な戦争が起きることを望んでいることに、私は警鐘を鳴らしたいと思います。

しかし、私たちが知っているのは、宗教の核心に二つの愛の呼びかけがあることです。それは、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」（マタイによる福音書 22 章 37 節）と「隣人を自分のように愛しなさい」（マタイによる福音書 22 章 39 節）との呼びかけです。この統合されたメッセージは、世界中から 138 人のイスラム学者によって署名され、2007 年に発行された共通の言葉の文書をとおして世の人は気づかされました。クルアーンを含む聖典のメッセージの核心は、「神を愛する」そして「隣人を愛する」という二つの掟に要約されると、その文書は宣言しています。

この愛すること、受け入れることという宗教的な誓いのメッセージは、チャールズ・キンボールが示した宗教が邪悪になるときに現れる「五つの警告サイン」とは対照的に、くっきりと際立っているものです。宗教的信仰が、神を愛し隣人を愛するというのではなく、邪悪に向かった時は、（1）絶対的真理の主張、（2）盲目の従順、（3）「理想」の時代建設の努力、（4）終末論的期待によるあらゆる手段の正当化、そして（5）聖戦の布告という兆候が表れます。こうした有害な宗教的信仰の五つの特徴は、「伝統に根差した包容力のある信仰」という見解によって脅かされると、キンボールは考えます。「神を愛せ」と主張しても実際は隣人を憎んでいるような過激主義者というのは、真の宗教から堕落した人たちです。ヨハネの手紙一の 4 章に書かれているように、「『神を愛している』と言ひながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません。」（ヨハネの手紙一 4 章 20 節）残念ながら、私たちの世界には多くの偽り者がいます。

今日、信仰の伝統の中にいる指導者は、自分達の真っただ中にいる過激主義者と対峙しなくてはなりません。過激主義は何となく信心深さの目安になるという考えを拒絶し、確固たる稳健を強く信じる人となって対峙するのです。稳健派はどっちつかずではありません。稳健派は独自性を持たない人ではありません。もし私たちが過激主義の神学に異議を申し立てて、過激主義の政治家が彼らを支持するなら、私たちのそれぞれの伝統の中にある中心となるものを取り戻すようにしなくてはなりません。ルーテル派のキリスト教徒としての私の願いは、すべての物事が和解するように、との神の願いに定められています。それは、我々の隣人と我々の地球の生態系と環境、両方のために今ここにある願いです。この願いは、私たちを隣人から隔てるものではなく、彼らの生活状態についてより大きな关心を私たちが寄せるようにとするものです。この考えに立って私たちは、公正さ、平和、平等、共に生きること、そして他者を受け入れるという共通の価値を支持し、排除するのではなく、受け入れようとするのです。今年、私たちルーテル派は宗教改革 500 年を祝していますが、それは神の恩寵による解放を中心的メッセージにした運動で、今日の宗教を過激主義と堕落から解放しなくてはならないと思います。

多くの世界的な問題や紛争の根本に宗教の違いがある、というのはよくある間違った認識です。パレスチナ－イスラエル紛争を含む多くの紛争には宗教的な要素が存在していますが、果たして宗教がその特定の問題の原因なのかと人はしばしば問うでしょう。さらに、宗教的な要素に焦点を当てることが、往々にして特定の問題の真の源を覆い隠してしまうのです。こうしたよくある認識は、世界的なそして身近な地域の政治における宗教の役割をさらに縮小させ、宗教を実際よりもはるかに単純なもののようにしてしまうのです。

複雑な状況下にある宗教指導者は、自分達が尽くしたいと思っているコミュニティの現在と将来を、宗教が助けもするし傷つけもすることを知っています。宗教指導者は政治家のミニチュアになってはいけないと同時に、自分達の社会、国家、そして世界の公正な平和を達成しようと努力する役割のあることに気付かなくてはなりません。本当のことを言えば、宗教指導者は、それぞれの信仰の基本的要素をとおして、社会の問題に取り組まなくてはならないのです。神を愛し隣人を愛するためには、眞の宗教の基礎を深く掘り下げなくてはなりません。

エルサレムは私に宗教間の対話の重要性が甚深であることを教えてくれました。エルサレムでは、他の宗教を日常的に目にすることのみならず、それぞれの宗教コミュニティの中にいる多くの人々に出会います。多様な信仰の一つひとつには、それぞれ様々な生き方があります。私がエルサレムのそれぞれ異なる宗教の中で出会う人のことをよく考えてみると、この多様性それ自体が過激主義に対する解毒剤であると思えてくるのです。エルサレムの隣人をとおして、私は対話の重要性を学んだのみならず、対話は信頼と友情に基づかなければ決してうまくゆかないという真理を学びました。

それぞれの伝統の中にある多様な人々を目の前にした時、もしあなただが謙虚でなければ、あなたの道は排他性と過激主義に通じるでしょう。まず最も大事なことは、宗教的過激主義者は、自分達のコミュニティの中に多様性を受け入れることができないということです。結果として、彼らは自分達の伝統の外にあるものに対しても多様性を受け入れることができません。他の者はすべて、背信者であり不信心者なのです。このことから私は、過激主義に取り組むには、まず初めに自分の伝統の中から始まるのだということを学びました。これは現代の宗教指導者の最も重要で核心となる責任です。私たちは、宗教指導者自身のコミュニティの中で過激主義を容認して共謀関係にあるような宗教指導者をしばしば目にします。もし私たちが過激主義を自分達のコミュニティの中で認めてしまったら、どのようにして他者の中の過激主義と対峙すれば良いのでしょうか。だからこそ私は、宗教を邪道に導く病んだイデオロギーに加担しないでほしい、断固として対峙してほしいと宗教指導者に願うのです。

今日における諸宗教の協働において焦点を当てなくてはならないのは、それぞれ特定の伝統の中における過激主義と対峙することです。宗教指導者は一致協力して切磋琢磨し智慧を分かち合わなくてはなりません。もちろん、世俗の社会や行政の指導者にも過激主義に対抗する役割がありますが、最も効果的なのは、それぞれのコミュニティの中から生まれてくる取り組みではないでしょうか。もし、過激主義が愛のアンチテーゼであるならば、私たちこそ愛によって動機付けられなくてはならないということが極めて重要です。

アブラハムの宗教の伝統の中では、私たちは、予言的に語り、権力を持つ者の標準的な考や行動に挑戦することをとても重視します。どのような宗教の信仰心あふれる実践にも予言的な責任があると、私は強く信じています。予言は、単に他に対して向けられるだけのものではないということを、私たちはとても忘がちです。真の予言的な批判や表明は、まず初めに自分の宗教、自分のコミュニティに向けられたものです。私たちの宗教コミュニティーの中にある墮落した要素に対して、私たちが自己批判的に断固として取り組むならば、私たちの宗教は、私たちと他の人々にとって、いのちの源となるでしょう。宗教が愛を押し広めようとするとき、真に予言的になるのです。

この予言的な愛のメッセージ、それは過激主義のアンチテーゼですが、そのメッセージは、私の住む都エルサレムで、そして世界中で今まで以上に必要とされているものです。宗教指導者だけでは、イスラエル—パレスチナ紛争に公正で平和的な解決策を与えられませんが、宗教指導者なしでも平和は訪れません。私は、地元の、地域の、そして世界の宗教指導者を招いて、人種、性別、政治的立場に関わらず他者の中の他者性を受け入れることを教える教育を広めようとしています。この教育が、学校で、家庭で、そして報道に携わるメディアでも、どうしても必要です。

さらに、より根本的には、平等の権利と多様性を受け入れる公平な責任がある市民権を平等に有するという概念から、中東地域、そしてもちろん世界全体が、恩恵を受けることができます。今日において、ある人々が平等を享受し、別の人々がより少ない平等を享受しているということが、往々にして受け入れられています。神が私たち一人ひとりを平等に創造され、そして、私の信仰によれば、キリストが私たち一人ひとりを公平に救ってくださるのだから、私たちは平等の市民権をもっているというのが私の信念です。全ての人間は、神がこの世界において意図されたように、尊厳と平和の内に生きられるべきなのです。

宗教間の対話という営みは芸術のようなもので、現代の私たちには、多くの芸術家が必要です。協調して働き、愛のシンフォニーとなるような群衆が必要なのです。そして共々に、神の御助けをいただき、反ユダヤ主義のない、イスラム嫌悪のない、キリスト教徒嫌いの

ない、外国人嫌いのない、そしてあらゆる種類の嫌悪のない新しい世界を、私たちは創作しなくてはならないのです。すべての人が、宗教や性別、宗派、階級、伝統に関係なく、声を出して創造の歌を歌うという義務と喜びがそこにはあります。

最後に皆さま、今一度、私に庭野平和賞を贈ってくださったことに対して、私は深く感謝申し上げます。この賞を受けることは、私が諸宗教対話の取り組みから卒業することではありません。むしろそれどころか、私のささやかな貢献をご照覧くださった方々がおられることを知り、息をし続ける限りは世界的に重要な諸宗教間の課題に対して取り組み続けねばと大いに励まされました。

心からの感謝を、私の家族、とりわけ諸宗教対話を強く信じる者の旅路を共に歩んでくれた私の妻スアッドに捧げたいと思います。そして、私の教会であるヨルダン及び聖地福音ルーテル教会と、私に国際的な舞台で発言し働く機会を与えてくれたルーテル世界連盟に感謝申し上げます。

親愛なる兄弟姉妹の皆さま、私たちが他者の中に神の顔を見るとき、今度は他者が、私たちの中に神の顔を見てくださるのです。その時に初めて、私たちは、平和と公正さ、世界における和解という神ご自身の目的を、遂行することができるのです。

皆さまお一人おひとりに神のご加護がありますように。